

NIKKEI

2018年 2月17日 土
(平成30年)

この一冊

塩野氏の考えるギリシア人の物語を象徴するのは、やはりペルシア戦争であろう。「ひとつつかみの小麦」にすぎないギリシアが大帝国に勝ったのは、持てる力をすべて活用する精神を我が物としたからだ。氏によれば、それこそギリシア文明がヨーロッパの母胎になり、精神を形成する要素になった。この戦争が明らかにしたのは、東方と違ってヨーロッパが「量」でなく「質」の資源の「活用」で勝負を決める特性であった。私のようなイスラム研究者からすれば、随分と大らかな結論であるが、真理の一端をきちんと衝いている。必要になればスパルタでさえ国王でなく若い王族が全軍の指揮をとり、伝統の一國平和主義を未練なく捨て

ギリシア人の物語 (I~III)

塩野 七生著



(新潮社・Iは2800円、IIは3000円、IIIは3200円)
しおの・ななみ 37年東京生まれ。作家。学習院大文卒。70年よりイタリア在住。著書に『海の都の物語』『ローマ人の物語』など。

美談では守れない民主主義

てしまう大胆さは、政治が職業でもある技術でなく、高度な緊張を要する生活であることを示している。そのうえ、アテネの指導者テミストクレスはペルシアの大艦隊を撃退するために、最高指揮官の地位を惜しげもなくスパルタに譲り、サラミスの海戦で勝利を収めた後には未練なく権力の座から離れた。これがギリシアの誇る民主主義だと著者は言

いたのだろうか。ギリシアの連合艦隊の指揮権は、スパルタ、アテネ、コリントと三つの国が握っていたのだから厄介このうえない。しかしテミストクレスはちゃっかりと作戦運用で最高指揮権を手放さない。このあたり著者は、民主主義とは「活用」だと言いたげである。他人の意見を聞くペルシアの帝王クセルクセスと、聞くそぶりをしても信念

を必ず通すテミストクレスを比べると、どちらが民主的か分らない。考えてみれば、民主主義の説得力とは、他者を自分の考えに巻きこむ能力であり、他者の意見を尊重して歩み寄るといった単純なものではない。ギリシア人は常に決断が早く、ペルシア人はいつも逡巡してやまない。普通考えられる民主主義と専制主義の個性が逆転しているのだ。民主主義を本当に機能させようと

すれば、時に陶片追放を使っても政敵を排除し、アテネの市街を放棄して住民を全面疎開させる決意も要求される。3巻から成る本書は、美談や偽善では民主主義を守れないことを教えてくれる歴史の叙述でもある。完結をまずは多としたい。

《評》明治大学特任教授

山内 昌之

読書